

**主 題：教会の一致と私たちの喜び②**

**聖書箇所：ピリピ人への手紙 2章3－5節**

**テーマ：神の家族がますます一致において成長していくために**

今朝、皆さんと一緒に見ていきたいのは、前回の続き、ピリピ人への手紙2：1－5のみことばです。先週学んだことを簡単に思い出してみてください。

**○教会に欠かせない一致に関して：**

私たちはパウロのことばから、教会にとって欠かせない一致について改めて考えていました。神の家族がバラバラではなくて、一つであることを願ったパウロが一致に関して大切な三つの要素を私たちに教えてくれたのです。その三つとは、一致のための動機、一致の特徴、一致の方法でした。どうして一致を追い求めるべきなのか、追い求める一致とはそもそもどんなものなのか、そしてその一致をどのようにして追い求めていくのか、そのことをみことばを通して1節から順番に彼は語っていたのです。そして先週、それら三つのうちの最初の二つを見ました。

**1. 一致のための動機 1節**

まず一つ目に、一致のための動機を考えました。信仰者たちが一致するために、パウロはどのように彼らを促していたでしょう？無理やりしていませんか？あれこれ一致のためにしなさいといきなり命令を与えていませんか？いいえ、まず彼らの立っている基盤、キリストにある立場を思い出させていました。1節には、「こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあ、御霊の交わりがあ、愛情とあわれみがあるなら」と書いてありました。パウロは愛する兄弟姉妹に向かって、救われたあなた方はもうみんなキリストにある励ましを、愛の慰めを、御霊の交わりを、愛情とあわれみを受けています、ことばに表すことのできないほどの恵みをすでに味わっていますと言っていたのです。そんな三位一体の神様の愛を自分のこととして知ったのであれば、それらが動機となって神様が喜ぶ一致を追い求めていきたいとは思いませんか。こうしてパウロは、何をするのかということよりも先に、なぜ一致を熱心に追い求めるべきなのか、その動機を改めて思い出させていました。一致を追い求めることは、すでに受けた大きな恵みに対する信仰者の自然な応答だったのです。救いがもたらしてくれた揺るがない最高の事実というものを覚えた時に、私たちが一致を求めていくというのはある意味当然のことでした。

**2. 一致の特徴 2節**

また、これに加えて二つ目に、一致の特徴も考えました。パウロはなぜ一致を求めていくのかだけではなく、どんな一致を求めていくのか、その具体的な姿形も教えてくれたのです。そしてそれは信仰者たちが同じ考え、同じ愛の心、同じ焦点を持つということでした。2節でパウロは、「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください」と言っていました。言うまでもなく教会は、さまざまな違いを持った人々の集まりです。国籍や文化も、性格や価値観も、性別や年齢、育ってきた環境さえ異なる人たちが一つの神の家族としてともに生きていこうとするのです。そんな違いがある中で、それぞれが勝手に歩み始めてしまえば、当然そこには争いや問題が生じてしまいます。だからこそみな同じキリストを知って、同じキリストにならう者として歩んでいこう、そう心に決めて、同じ犠牲的な愛を互いに示し合い、キリストの栄光と福音のために同じ目標を目指して歩んでいくことは欠かせないことでした。そんな一致こそ、当時の信仰者たちに、また今の私たちにも求められていたことだったのです。そしてそんな一致こそ、パウロだけではなくて、めぐりめぐって私たちにも大きな喜びもたらしてくれるものでした。

**3. 一致の方法 3－4節**

さて最後は、一致の方法でした。パウロは、一致がどんなにすばらしいことなのかということ、私たちにとって喜びなのかということだけを口にして終わっていたわけではありませんでした。一致が重要なことであるとだけ述べて、あとは自分たちでおのこの独自に考えて求めていきなさいとは言わなかったのです。もしそうだったら、私たちにはどうしようもなかったでしょう。でも感謝なことに、みことばは明白に教えてくれていました。いったいどうしたらみことばが教えている一致を成し遂げることができるのか、兄弟姉妹とますます一つのものとして成長するにはどうすればいいのか、パウロは3-4節の部分でその答えを教えてくれていました。もっと言えば、一致のために私たちが実践すべき三つのことがここに挙げられていたのです。具体的にどんな方法、手段だったのか見ていきましょう。

まずはいつものようにみことばお読みします。

### ピリピ2：1-5

「:1 こういうわけですから、もしキリストにあつて励ましがあつて、愛の慰めがあつて、御霊の交わりがあつて、愛情とあわれみがあるなら、:2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだつて、互いに人を自分よりもすぐれた者と思ひなさい。:4 自分のことだけではなく、他の人のことも願ひなさい。:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」

では、一致の方法、手段に関して一緒に考えてみましょう。初めにも言いましたが、パウロは一致のために私たちが実践すべき具体的な方法として、三つのことを教えてくれていました。

#### 1) 自分のことにもみとらわれない 3 a 節

一つ目は、自分のことにもみとらわれないということです。ある意味当たり前のことのように聞こえるかもしれませんが、でも一致のためには、それぞれが自分自身のことしか考えない、そんな自己中心的な態度であつてはならないとパウロは言うのです。3節の頭に、「何事でも自己中心や虚栄からすることなく」とあります。ここでパウロは、ただ単に「自己中心や虚栄からすることなく」とは言わずに、「何事でも」と強調していました。「何事でも」というのは、「どんなことでも」ということです。要するにパウロはいつもどんなことにおいても、自己中心や虚栄からすることのないようにと求めていました。信仰者たちにとって、利己的な思いで何かをしてよい場面はいっさい存在しないということです。どんな理由があつて、どんな時であろうと、自分のことしか考えない、そんな勝手な態度はあつてはならないと言うのです。

考えてみてください。さまざまな場面で、私たちは例外というものを設けたりすることがあるかもしれません。いろいろな理由を言い聞かせながら、この場合は仕方ないと自分本位な態度を正当化しようとするところがあるかもしれません。でもパウロは、初めにはっきりと言つていたのです。救われている者は、何事でも自己中心や虚栄からするようなことがあつてはいけませんし、例外は一つとしてありません。またここでは特に「自己中心」と「虚栄」という二つのことばが使われていたのですけれども、実際にそれぞれどんな意味を持っているのでしょうか。

#### ▶ 「自己中心」

まず、前者の「自己中心」ということばですが、これには文字どおり、「自分本位」とか「わがまま」、「利己的な野心」、「利己的な争い」といった意味が含まれています。つまり自己中心的な人物というのは、いつも自分の益を最優先にして、神様やほかの人のことなどお構ひなく、それを執拗に追い求めるような人のことです。この人物というのは、自分が何かを得るために何かをする人のことです。何をするにしても、自分というのが常にその中心にいます。例えば私が願つている、欲しているものを与えてくれるなら、自分も喜んで与えましょう。私を満足させてくれるのですね、それなら自分は何かをしなさいと。私にも同じように報いてくれるのなら、自分も進んで仕えましょうと。もしかしたら多くの犠牲をそのために払うかもしれません。でもその根底には、自分にはいったい何があるのだろうかという思い

が存在しているのです。そしてもし思い描いているものを手に入れられなければ、憤りや不満を覚えたり、苦い思いを懐いたり、愛とあわれみを示すことをやめるのです。それが「自己中心」でした。

こんな自己中心が存在していれば、神様の栄光を現そうとする教会はどうなってしまうのでしょうか？兄弟姉妹との関係には、いったいどんな影響をもたらすようになってしまうのでしょうか？教会に集う時、私たちの態度が、神様のために何ができるでしょうかではなくて、ほかの人のことを忘れて自分自身が何をすることができるでしょうかであるならば、ヤコブは同じことばを用いて一つの答えを記していました。ヤコブ3：14－16に「:14 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心（2017年版では「利己的な思い」）があるならば、誇ってはいけません。真理に逆らって偽ることになります。:15 そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。:16 ねたみや敵対心（利己的な思い）のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがあるからです。」と記されています。利己的な思いがあるところには、秩序の乱れがあると言われていました。言いかえれば、そこには一致など存在しないというわけです。だからこそパウロはすべての信仰者に、何事でも自己中心からするようなことがあってはいけませんと、求めていました。

### ▶「虚栄」

でも、それだけではありませんでした。これに加えてここでは「虚栄」ということばも用いられていました。このことばは、もともと二つのギリシャ語「空っぽ」を意味する“ケノス”と「栄光」や「賞賛」を意味する“ドクサ”というものがくっついてできたことばでした。漢字を見てもよくわかりますよね？文字どおり「空っぽの栄光」とか「虚栄心」とか「慢心」、「うぬぼれ」といった意味で用いられました。中身がない空っぽの栄光ということです。中身がないのにうぬぼれているということです。虚栄心ということです。つまり虚栄心の強い人物というのは、周囲に対してよく思われたいとか、感謝されたいとかそういった本来の自分よりも自分を大きく見せようとする人のことを言うのです。まるでパレードに並んでいる大きな風船です。風船は外から見れば見た目は巨大で、すごいと思っても、その中身はただの空気です。虚栄心を持っている人物は、周りの人からすごいと認められたり、感謝されたりすることを望んでいて、ただ空っぽな自分自身の栄光を追い求めているのです。

そしてこれは、小さな問題ではありませんでした。どうしてかと言うと、こんな態度というのは、本来であれば神様だけが栄光に値するのに、その栄光を自分のものにしたいという高慢さの表れだからでした。神様ではありません、自分のやっていることを見てください。こんなにも一生懸命な自分の働きに感謝してください、自分の払っている犠牲を正しく覚えてくださいと。でも、もちろん私たちは、このようなことを実際に口に出して言ったりはしないでしょ。私たちがお互いの間で、あなたのために私はこんなことをやってあげました、さあ感謝してください、さああなたも私に対して何かやってくださいなどと、私たちは口にはしないでしょ。でも、たとえ口にしなかったとしても、私たちの態度がそれを物語っていることが多々ありません？確かに最初は正しい思いで始めたことも、自分の払ったその犠牲が感謝もされず、むしろ当たり前のように思われていけば、次第に自分の中で喜びが失われ、いらだちを覚え始めるかもしれません。自分は毎日のように仕えているのに、何もしてくれない人がいるのであれば、次第に不平不満になって現れ始めるかもしれません。自分が一生懸命にしていることをないがしろにされてしまえば、最初は神様に対する感謝を持って始めたことが、次第に怒りやつぶやきに代わって、相手との間に争いを生じさせるかもしれません。

私たちは、どうしてこんな態度をとるのでしょ？ある人は言うかもしれません。自分は何も悪くありません。私は最初感謝を持っていました。でもあの人あのひどいふるまいが私を不満にさせたのです。でも、果たしてそうなのでしょうか？みことばはそうは教えていませんでした。ヤコブ4：1－2に「:1 何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。:2 あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをします。うらやんで

も手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。」と記されています。いったい何が争いの原因だと言われていました？周りの状況や相手のひどいふるまいではなく、私たちの中で戦う欲望が原因でした。自分の欲しているものを手にすることができなければ、私たちはそのために争ったり戦ったりするのです。相手が自分の思いどおりにならなければ、相手が自分の願っている態度やふるまいを示さなければ、相手が自分をふさわしく扱ってくれなければ、私たちはいらだちを覚え、不平不満を口に、相手との間に争いを引き起こすのです。でもそれは、何が起きていると思います？それは何をやるにしても、神様に栄光を帰すべきなのに、そのことを忘れて自分自身が認められることを求めてしまっているということです。そしてこれを私たちは普段気づいていないことが多いのです。

でも残念ながら、すべてをなしてくださる神様だけに値する賞賛や感謝というものを、自分も少しは受けるべきだという虚栄心を、私たちはみな持っているということです。私も持っています。皆さんも持っています。自分自身を中心とする思い、高慢さ、プライドというものは、もう既に私たちのうちに住みついているのです。スチュアート・スコットという牧師もこんなことばを残していました。「プライドは蔓延している悪です。どこにでも存在し、様々な形で表れます。認めたくないかもしれませんが、私たちは皆、誰もが高慢さを抱えています。問題は『私はそれを持っているか？』ではなく、『どこにそれがあるか？』そして『どれだけそれを持っているか？』なのです。」。どう思います？こんな虚栄心というものが存在すれば、神様の栄光を現そうとする教会はどうなってしまうでしょう？兄弟姉妹や夫婦の間において、親子関係において、家庭の関係において、この虚栄心はどんな影響をもたらすようになるでしょう？間違いなく、そこには一致ではなく、いろいろな問題が生じてくるようになるでしょう。だからこそパウロは、ピリピの信仰者たちに何事でも虚栄からするようなことがあってはいけませんと求めていました。

そして同じことが今の私たちひとりひとりにも言われていたのです。立ち止まって、一緒に考えてみてください。いったい私たちは今、どの部分において自己中心や虚栄心を抱いているのでしょうか？持っていない人はいません。おもしろいのは、私も含めほかの人の問題であれば、私たちは容易に見抜くことができます。でも、問題は自分自身が脱ぎ捨てるべき部分がどこにあるのかということです。忘れてはいけません。パウロはここで、ある瞬間、ある場面だけへりくだることを求めていたのではありませんでした。何事においても、自己中心や虚栄からすることのないようにと求めていたのです。言いかえれば、親しい友人の前だけ喜んで犠牲を払って仕えて、親しくない兄弟姉妹には何かの見返りをいつも期待して仕えるのではないということです。教会では神様のために何ができるのかということを求めて、家庭では自分自身が感謝されることを求めるのでもないということです。そのような限定的な謙遜というものは、みことばから見れば謙遜でも何でもありませんでした。むしろそれはただ自己中心や虚栄の現れだと言うのです。余りにも厳しいことが言われていました。それでもなお自分のことにのみ囚われないということが、私たちに求められていた一致のための一つ目の方法だったのです。

## 2) 自分のことについて正しい考えを持つ 3 b 節

そしてそれに加えて、パウロは二つ目のことを教えてくれていました。これは分けて考えないでください。同じように一つのものとして考えてください。一致のために実践すべき二つ目のことは、自分のことについて正しい考えを持つということです。3節は「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、」のその後、「へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」と続いていました。パウロはAをしないでBをしなさいと言っていたのです。パウロの教えていることは明白でした。信仰者はただ単に自己中心や虚栄からあらゆることをしなかつたらいいものではありません。同時に、それぞれが互いの間でへりくだることが欠かせないと言うのです。

ただ皆さんにここで覚えておいてほしいのは、この「へりくだる」ということは当時の人々からしたら到底信じられないことでした。というのも、ご存じの方もいるかもしれませんが、この時代「謙遜」とい

うのは人々の間で否定的にとらえられていたものだったのです。ひとりの注解者はその様子をこんなふうに描いてくれていました。「新約聖書の時代以前『謙遜』という言葉には、否定的な意味合いがあった。この言葉は頻繁に用いられ、特に奴隷の心理を表現するときによく使われた。これは卑しい、能力のない、みすぼらしい、卑劣で、何の価値もないといった様子を伝えるものだった。それゆえに、『謙遜』は異教徒にとって求めるべき美德とは見なされなかったのだ。」。少し想像してみてください。現代であれば、あの人はへりくだった人ですと言われればうれしいことでしょう。でもこの時代、ピリピの信仰者たちがいた社会においては、そのことばは褒めことばではありませんでした。卑しい奴隷のような存在を指して言われていたのです。この手紙を見たピリピの人たち、パウロのことばを聞いた信仰者たちは驚いたと思いませんか？聞き間違いですか？パウロは私たちに何も持たないしもべになれると言っているのですか、まるで奴隷のように互いにふるまうと、そんなことを言っているのですかと。でも、これこそが神様が求めていたことでした。もっと言えば、これこそがご自身をへりくだらせ、模範を示されたイエス・キリストがすべての弟子に対して求めていたことだったのです。

例えばマルコの10章で、イエス様がこれからご自分がとらえられて、十字架につけられて殺されるという話を弟子たちとした後、ふたりの弟子、ヤコブとヨハネはとんでもない頼みごとをしていました。彼らは今まさに十字架の話聞いたのに、イエス様のことを心配することよりも、自分たちの将来を気にかけて、天にあってイエス様の右と左に座らせてくださいと頼んでいたのです。間違いなく彼らの関心は自分のことにありました。そして自分勝手な彼らに対して、ほかの10人の弟子たちも腹を立てていました。自己中心が存在するところには、やはり不一致や不和が存在していたというのです。

では、そんなみにくい争いが生じている弟子たちに対して、イエス様はどんなことを教えられたのか——。その時の様子がマルコ10：42－45に記されていました。「：42 そこで、イエスは彼ら呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。：43 しかし、あなたがたの間では、そうでありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。：44 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい。：45 人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」と。そしてまさにこのことばのとおり、イエス様はご自身のいのちを喜んで捨ててくださいました。本来なら栄光だけが値するそのお方が仕える者として来られ、人々に忌み嫌われた挙句、最後には十字架の死にまでも従って救いのみわざを成し遂げられたのです。だからこそこんな救い主に救われた私たちもみな、この方の姿にならって喜んでへりくだろうとするのです。

「謙遜」はキリストの模範にならうことでした。そしてそんな「謙遜」というのは、特に私たちのうちにこんな形として見られるものだったのです。ピリピ2：3の続きに、「へりくだって」のその後、「互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」とあります。「謙遜」は、こんな形で現れていたのです。私たちが、互いに相手が自分よりもすぐれた者、重要な者としていつも考えること、そんな心の態度が謙遜を求める上で欠かせないと言うのです。

#### ▶「思いなさい」

覚えていてほしいのは、ここで登場した「思いなさい」ということばには、「何となく何かを考える」という意味ではなく、「よく考えて結論を出す」という意味が含まれているということです。学生時代、私が一番苦手な教科は数学でした。当たり前ですが、数学というのは問題を解いている時に、どれだけ感情的になったとしても正しい答えは出てきてくれません。またちゃんと問題を読まずに、何となく適当に解いたとしても正解にはたどり着かないのです。しょうもない間違いで、私は何回先生に怒られたことか、もう覚えていません。おもしろいのは、この「思いなさい」ということばにも、もともと数学用語としての「数える」とか「計算する」という意味が含まれているということです。つまり私たちが互いに自

分よりも相手をすぐれた者と思うというのは、単に感情的にそう思うのではないということです。何となくそう思うのでもありません。ましてや、あの人は自分よりもすぐれていますと、実際は全く思っていないのに、無理に思い込もうとするのでもありません。パウロはそんな見せかけだけの尊敬の話をしていたのではなかったのです。そうではなく、事実に基づいて注意深く考えた上で、確かな結論を、判断を下すことを表していました。自分よりもほかの人が重要であると深く考えて、そしてそれを自分のこととして信じていることが言われていたのです。それが「互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」ということでした。何となく隣の人を見て、ああ、あの人はすぐれていますね、そんなことではありませんでした。あの人はすぐれている、重要な人物だということを深く考えるのです。

でもいったいこんな態度はどこから生まれてくるのでしょうか？実際の歩みにおいて、そうしなさいと言われても難しさを覚えます。どうしたら私たちはどんな時も自分ではなくへりくだって相手のことを中心に考えることができるのでしょうか？その一つの鍵は私たちが主の姿に心を留め、その主の前に自分自身の立場を正しく覚えることでした。もう一度言いますが、私たちが主の姿に心を留めて、その主の前に自分の立場を正しく覚えることでした。

改めて考えてみてください。そもそも私たちに何か誇りとするようなものはあるのでしょうか？聖く正しい神様の前に、忌み嫌われる罪を頑なに犯し続けてきた私たちに値したのは、ただ永遠の滅びだけでした。みずからの意思で神様を拒み、逆らっていたような者が、その神様から永遠に引き離され、地獄で苦しんだとしても、ある意味それは当然の結果でしかありませんでした。しかし、そんな罪深い私たちに神様が愛を示し、キリストの十字架のみわざを通して信仰によって救いを与えてくださったのです。私たちのだれにも何もどうすることもできなかった罪の問題を、あわれみ深い神様が解決してくださったのです。忘れてはいけません。私はただ恵みによって罪を赦され、ただ恵みによって今生かされているだけに過ぎません。パウロはそのことを正しく理解していました。パウロはそのことを正しく覚え続けていました。だからこそ彼は何度も何度も口にしていたのです。例えばIコリント15:9-10では「:9 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。:10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。」と言っていました。Iテモテ1:15-16にも彼は「:15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。:16 しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。」と言っていました。パウロは、ただ神の恵みによって、あわれみによって救われた者であるという自分自身の立場をよくわかっていました。

果たして私たちは、自分自身について正しい考えをいつも持っているのでしょうか？自分自身も考えさせられたので、マッカーサー先生のことばをレジメに載せました。「さて、こう考えてみてください。あなたは他の誰よりも、自分自身の心の罪について知っていますよね？では、もし私たちが直接得た情報に基づいて話をするなら、これまでにあなたが会ってきた中で最悪の罪人は誰ですか？それはあなたです。最も腐敗した心の持ち主は誰ですか？もしあなたが正直であれば、自分だと言うでしょう。なぜなら、他の誰かの心に何があるのかあなたには分からないからです。親愛なる友よ。あなたは他の人を自分よりも優れていると考えるのに十分な情報をもう既に持っているのです。」と。まさにそのとおりだと思います？私たちは自分自身の罪深さですら完全には理解できていません。でもそれでもなお少しでも聖なる神様の前に自分の立場を正しく知っているのであれば、私たちもパウロのように「私は罪人のかしらです」と。ただそんな私が今恵みを受けたのですと、そう感謝することになりませんか？たとえ私たちが周りの兄弟姉妹のことを詳しくわからなかったとしても、たとえ自分自身に対して不当な扱いをするような者がいたとしても、互いに自分はほかの人よりもすぐれた者ではない、そう考えるのに十分な情

報を持っていると思いませんか？喜んでへりくだって、どんな人に対しても仕えましようとなりませんか？こうして自分のことについて正しい考えを持つということ、これが私たちみなに求められていた一致のための二つ目の方法でした。

### 3) 自分のことではなく、ほかの人の必要を満たす 4節

そして最後、一致のために実践すべき三つ目の方法は、自分のことではなく、ほかの人の必要を満たすということです。3節から4節はずっと続いています。当たり前ですけれども、自己中心や虚栄からするような自分が中心の者はへりくだっていないのです。でもへりくだっている者は互いに人を自分よりもすぐれた者と思います。でもそれで終わりではないのです。本当にへりくだっている者というのは、互いに人を自分よりもすぐれていると考えるだけではなくて、同時にそれが実際の行動となって現れると言うのです。4節に「自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」と記されていました。

#### ▶「顧みなさい」

ここで出てきた「顧みなさい」ということばには“スコペオ”というギリシャ語が使われています。実はこの“スコペオ”というのは、今のあることばの語源になっています。それは「何かを見るための機械」、スコープでした。例えば英語では顕微鏡を“マイクロスコープ”、望遠鏡のことを“テレスコープ”と言います。では、そんな顕微鏡や望遠鏡といったものを私たちは何のために使います？当然それでもって何かを注意深く見たり、丁寧に観察するために使いますよね？そしてまさにそれがここで使われていた「顧みなさい」ということばの表わしていることでした。信仰者たちが自分から視線を外して、ほかの人に視点を置くのです。私たちが自分自身の必要や権利や考えや意見に焦点を合わせるのではなくて、ほかの兄弟姉妹の必要や権利にいつも焦点を合わせることに、ほかの人のことをいつも丁寧に観察して必要を満たしてあげようとする、そのことをパウロは求めていたのです。もちろん勘違いのないように言うておきますけれども、これはへりくだるためには私たちが自分自身のことを全く気にかけずになりがしろにするという話をしていいるのではありません。そうではなくて、ここでのポイントは、私たちの焦点の話でした。へりくだって自分より周りの人が重要だと本当に心から考えている者は、自分自身の必要を満たすこと以上に、兄弟姉妹の必要に気を配り、それを満たそうとすると言うのです。自分のことではなくて、ほかの人の喜びやほかの人の益のためにどんな時も喜んで仕えること、それがみことばが教えてくれている「謙遜」でした。

だとすれば、改めて考えてみてください。果たしてこんな「謙遜」を今私たちは働かせているでしょうか？感謝なことに私たちはきょうもこの場にこうやって集うことができました。ライブ礼拝を持つこともできています。でも皆さんはいったいどんな思いできょうやって来たでしょうか？きょう私は何を手にすることができるのだろうか、教会や兄弟姉妹が自分にいったい何を与えてくれるのだろうかといった自己中心的な思いからでしょうか？それとも自分は何を神様にささげることができるのだろうか、いったいどのようにして自分はほかの兄弟姉妹に仕え、必要を満たすことができるのだろうかといったそんなへりくだった思いからでしょうか？私たちは普段からいろいろな必要や課題をそれぞれに抱えています。難しさを覚えて励ましや慰めを必要とすることもあります。主のために生きていこうとするその時において、みことばからの知恵や教えを必要とする時もあります。罪に陥っていれば、ただ叱責や訓戒が欠かせない時もあります。ことばだけではなくて、私たちは実際の助けを求める時もあるのです。そして私たちがそれを必要としているのと同じように、皆さんの隣にいる兄弟姉妹もそれを必要としているということです。だからこそ私たちが謙遜になることは欠かせませんでした。自分中心ではなくて、ほかの人を重要な者として覚えて、その必要を満たそうと機会を探し求めていくことが欠かせませんでした。確かに罪深い自分のために、私のために、あなたのためにそのいのちを捨ててくださった主は、ほかの兄弟姉妹のためにも同じようにいのちを捨てられました。そんな尊い犠牲を覚える時に、私たちは喜んで互いにへりくだり、仕え合っていこうとするのです。間違いなく言えるのは、私たちはこの「謙遜」にお

いて、まだまだ成長しなければならないということです。自分自身もこの一週間、この3－4節を特に考え続けていましたけれども、このみことばの基準に照らし合わせて考えるのであれば、数多くの足りない弱さを見ました。願わくは皆さんも同じように考えてくださればと思います。こんなへりくだりこそ、パウロや主が喜んでくださり、また何より私たち自身にも喜びをもたらす、神の家族の一致に欠かせないものだったということです。だとすれば、キリストにあって救われたその立場というもの、その特権というものにいつも心を留めて、その感謝の思いからますますへりくだって一つのものとして一緒に成長していきましょう。